



映画に
宛てた
ラブ
レター

2014年11月号

天見谷行人

グレース・オブ・モナコ 公妃の切り札

グレース・オブ・モナコ 公妃の切り札

2014年10月21日鑑賞

おとぎ話と”愛”を信じるあなたに

モナコと聞くと、僕なんかはモータースポーツファンだったので、アイルトン・セナが走っていた頃の、モナコ・グランプリを懐かしく思い出します。

モナコ・マイスターと呼ばれたセナ。表彰台の横には恰幅のいいおじさんがいて、優勝トロフィーを渡していたっけ。

このおっちゃんこそ、モナコの一番エライ人。国家元首のレーニエ大公だったのですね。僕は後から知りました。

本作の主人公は、その奥様、グレース・ケリー王妃であります。

演じるのはニコール・キッドマン。

僕は特に彼女のファンではなかったけれど、本作での彼女は実に「上質な」演技だったと思います。



美貌と気品、そしてなにより、家族とモナコ公国を、誰よりも愛した「一人の女性」「一人の母親」を演じきっております。ニコール・キッドマンの女優人生にとって、本作はきっと記念碑的な作品になる事でしょうね。

舞台はモナコ公国の王室、ロイヤルファミリー。

当然、その舞台装置はたいへん豪華で、格調高いものです。その室内調度品や、美しい建築、モナコの風景を、スクリーンで鑑賞するだけでも見る価値あります。

本作であらためてモナコ公国、その国の運営を学ぶ意味があると思いました。

Wikipediaで早速調べてみました。

モナコは国連加盟国中、2番目に小さい。ほんとうに「ちっぽけな国」なんですね。

国内産業については、なんと、日本の鳥取県の「県内」総生産の30% マジか！？ ですよ。それで国としてやっていけるの？ と素朴な疑問がわきます。実はこの国、最大の産業は観光なんですね。

カジノがあります。そして何より、個人には課税されない「タックスヘヴン」なのです。つまりは大富豪達にとってはこんなに住み心地のいい、オイシイ国はないわけですね。

それらの大富豪が、住み着いてくれば、暮らしてゆくのに当然、消費が見込める。それも大富豪の消費ですよ。僕ら、ワンルームの賃貸アパートに住んでいる人間とは、使うお金の桁が天文学的に違うでしょう。

まあ、そんなお金で、このモナコ公国が成り立つ訳であります。

さて、そんなモナコを快く思わない国がある。

お隣のフランス。

時の大統領はドゴール大統領。

モナコのことを苦々しく思っている。だって、フランスのお金持ちや、会社がみんなモナコへ逃げちゃうんだもん。

フランス政府の財布にお金が入らない。

アッタマに来たドゴール大統領。なんと、モナコとの国境線を封鎖し、軍隊を出動させます。

「言う事聞かないと、ぶっ放すぞ！！」とモナコに脅しをかけた訳です。

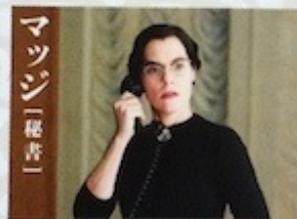
しかも、モナコにとってさらにまずい事がありました。モナコ公国は電気、ガス、水道などのライフラインを、全部フランスに頼り切っていたのです。これを止められたら、それこそ一巻の終わり。国家は消滅です。

えめであることを望まれる。そんなある日グレースがヒッチコックからのハリウッド復帰の誘いに心を動かされたとき、レーニエは過去最大の危機に直面する。フランスのド・ゴール大統領が過酷

果たしてグレースが自ら書いた“脚本”の命運を握るスピーチとは——？



敵か、味方か



グレースをとり華麗なるフィク



Principality of Monaco モナコ公国 フランスに囲まれた面積2,02平方キロメートルのバチカンに次いで世界第2の小国。国土は日本皇室の約2倍。人口は36,136人(2012年、モナコ財務経済省)。現大公はレーニエ3世とグレースの息子、アルベール2世。

監督:オリヴィエ・ダアン「エディット・ピアフ〜愛の讃歌〜」
出演:ニコール・キッドマン「めぐりあう時間たち」 ティム・ロス「海の上のピアニスト」 フランク・ランジェラ「ドラキ」
配給:ギャガ GAGA 原簿:Grace of Monaco/2013年/フランス/カラー/103分/シネスコ/5.1chデ
grace-of-monaco.gaga.ne.jp www.facebook.com/gagajapan f twitter:@gagamovie twitter

そんな土壇場をグレース王妃、レーニエ大公は、どう対処していったのか？ フランスの圧力に屈して、属国になるのか？ そういえば、どっかの国は、首相が数年で交代する度に、真っ先にアメリカにご機嫌伺いに行ってますなあ〜。こういうのは実質的な属国ですね。まあ、いいです。

そういう選択を迫られる訳です。

僕がこの映画で教えられた事。

軍隊なんていらぬ。必要ない。

ましてや「ゲンシリョクむら」なんていう巨大産業体なんてまったくのナンセンス。

そんなものなくても「モナコ公国」というちっぽけな国は、見事に、実に見事に、絶体絶命の危機を乗り切りました。

モナコに軍隊はありません。

モナコは一発の弾も撃つ事なく、フランスを国境線から撤退させる事に成功しました。

モナコにとって、とっておき、最後の切り札。

それこそが「グレース王妃」の存在だったのです。

明日にもフランスから、爆弾の雨が降らされるかもしれない。そんな中、グレース王妃は、勇敢にも「大舞踏会」を催し、敵対するドゴール大統領さえ、ご招待してしまいます。

その舞踏会でのスピーチは絶品です。

あのチャップリンの「独裁者」でのラストシーンのスピーチ。あれに肉迫するような、ニコールキッドマンの熱演でした。

「私はおとぎ話を信じます。世界はきっと変えられる。人々の“愛”によって変えていけると信じ

ます」

この力強いメッセージ。

おとぎ話と愛を信じるあなたに。

是非、スクリーンでご堪能頂きたい作品です。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 オリビエ・ダアン

主演 ニコール・キッドマン、ティム・ロス

製作 2012年 フランス

上映時間 103分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=nfpwL8NEhR4>

ジャージー・ボーイズ

ジャージー・ボーイズ

2014年10月23日鑑賞

なんて素敵な映画なんだろう

ああ、なんて素敵な映画なんだろう。

これを観たら「アナと雪の女王」さえ、かすんで見えてしまう。

ああ、なんて素敵な音楽映画なんだろう。

監督は、あの人です。

もう、映画界の巨匠と言っていいでしょうね、ここまで来ると。

クリント・イーストウッド監督であります。

クリント監督は「ハズレ」が、まあ、ほぼ、ないんです。

クリント監督の作った作品なら、どんな作品でもそれなりに面白い。

感動したり、泣けてきたり、複雑な感情を、いともたやすく映画の中に絶妙なブレンドで溶け込ませてくれる。

それは、とびっきりうまい、香り高いコーヒーを飲む時のよろこびや、極上のお酒をチビリとやって「うまいなあ〜」と舌を鳴らして感嘆する。そんな極上の時間を演出してくれるのです。

僕は以前、映画館で本作のチラシが置かれているのを観ました。



棚の下の方にひっそりと置かれていました。

チラシの片隅に四人の若者達。

暗がりの中、路上で、スポットライトを浴びてコーラスしている。

全然目立たない、これで宣伝用のチラシなの？ と疑うような地味なチラシでした。

手に取ってみると、小さな文字で「監督 クリント・イーストウッド」とありました。

「うそでしょ?!」

もっと派手に宣伝しなさいよ！ と思いました。同時に、これは絶対に観に行こうと思いました。

結果。観て損はありませんでした。

もう一度1800円払ってでも「もう一回観たい!!」と思わせてくれました。

僕みたいなヘタクソな物書きの感想文読んでる暇があったら、さっさと映画館へ鑑賞しに行ってくださいませ。

この映画を観るには、出来れば、とびっきりお洒落してゆくといいですよ。恋人やご夫婦で観るもオススメです。

観終わったら、美味しいワインでも傾けながら、この映画をお二人で語り合う、なんてのもいい趣味ですね。

本作は1950年代から60年代にかけて、まさにアメリカン・ポップスを席卷した「ザ・フォー・シーズンズ」というコーラスグループの結成のいきさつから、その解散、そして現在までを描いたものです。

2時間あまりの中に、それだけの内容を詰め込むのは無理があるのでは？ と思いでしょが、そこはアナタ、巨匠「クリント監督」なんですよ。

脚本は抜群の出来。ストーリーは実によどみなく進みます。しかし、重要なポイントはじっくり描かれてます。

メリハリが効いてるんですね。だから、観ている観客は全然疲れない。

「ザ・フォー・シーズンズ」のメンバーはニュージャージー州の、ありふれた田舎町の不良少年でした。

どっかから、くすねてきたグッズを売りさばいては、それで遊ぶ金を稼いだりしている連中でした。

ただ、彼らの幸運は、たまたまメンバーだったフランキー・バリ（ジョン・ロイド・ヤング）の声が、実に「イカしていた」ことです。

彼の甘ぁ〜い裏声（ファルセットといいますね）は、クラブの女の子達を虜にしちゃいます。誰もがうっとりする歌声。その声を聞いて、これも一人の才能あふれるピアノ弾きの若者が「ぜひ、こいつと組んで、バンドをやりたい」と思いたちます。こうして結成されたのが「ザ・フォー・シーズンズ」

やがて彼らはメジャーデビューを果たします。

レコードは売れる、売れる!! テレビ、ラジオには引っ張りだこ。コンサートのチケットは即「SOLD OUT!!」



お金が入ってきます。

高級車も買った。群がりよってくる女の子は選び放題。

まさに、アメリカンドリーム、これこそ、サクセスストーリーの王道！！

と、思いきや、彼らにある災難が降り掛かります。それは彼らのグループ活動はおろか、人生を狂わせるほどの、深刻な事態でした。グループはあわや解散と言うところまで追い込まれるのですが.....

本作を観ていて、ぼくはまるでコンサート会場にいるような錯覚を覚えました。本作で使われる音楽はまさに極上。

クリント監督は、自身でも作曲するほどの音楽好きで知られていますね。

音楽への造詣が深い、それも映画音楽について熟知している。

どこでどんな音楽を使ったら、この映画はもっと「美味しくなる」のか？

それをクリント監督は、もうねえ、知り抜いてるのね、この人。

だからこれだけ素晴らしい音楽映画を作れたんですね。

アメリカンポップスを題材にした映画と言えば

ジェイミー・フォックス主演の「Ray」やマイケル・ジャクソンのドキュメンタリー映画「THIS IS IT」などがすぐに思い浮かびます。

これらがお好きな方には、本作はきっと受け入れられるでしょう。

どうぞ映画館で、素敵な4ビートの”ヨコノリ”で、スウィングしちゃってください。楽しい作品ですよ、

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 クリント・イーストウッド

主演 ジョン・ロイド・ヤング、エリック・バーゲン

製作 2014年 アメリカ

上映時間 134分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=hpBPUapfxag>

蝸の記

蝸の記

2014年10月12日鑑賞

武士ならば弱いものを守りなさい

佇まいの良い作品だなあ～。監督は小泉堯史氏である。

この人は山本周五郎原作、黒澤明監督の遺稿「雨あがる」を監督した。

僕は原作を読み終えた後、しばらく涙が止まらなかった。

ありふれた「市井の人たち」を映画作品として撮る。

しかし、ありふれたひとたちであっても、人の事を思いやる、弱い人の心に寄り添う。そんな生き方が出来る人は、それだけであっても、今の世の中、映画の主人公として撮る価値がある。

本作を観終わった後、小泉監督が表現したかった事が、自分の腹の奥底の方に、ストーンと落ちてゆく。

後味が清々しく、美しい作品である。



どこかの国のエライ人が「美しいニッポン」と言った。

「ゲンパツ」とかいう「ホーシャノー」を垂れ流す「巨大湯沸かし器」は「コントロールできています」と言いきった。

こういう人たちはきっと、「人の事を思いやる、弱い人の心に寄り添う」よりも「自分の出世を思いやる、そのためには、より強い人に寄り添う」のだろう。

そういう人たちに、この作品を見せてあげたいと思う。

まともな人間なら、きっと自分の生き様に「恥」を感じるだろう。

この映画の主人公のように三年先と言わず、今すぐ

「腹を召されよ！！！」

と巖に申し上げたい。

本作の主人公、戸田秋谷（とだしゅうこく・役所広司）は不祥事を起こし、三年後に切腹する運命を受け入れている。

今は自宅蟄居の身だ。その見張り役として、藩から命を受けたのが岡田准一演じる、壇野庄三郎である。壇野は、戸田の逃亡など、不審な行動がないかを常に監視する。しかし、壇野がそこで見たのは、同じ武士として、戸田が極めて尊敬すべき人物であったことだ。

彼は一つの疑問を抱くのである。

本当にこの戸田が「藩主の側室と一夜を共にした」という、驚嘆すべき大罪を犯した人物なのか？

やがて壇野庄三郎は、藩の根幹を揺るがすような事実を知るのだが……

この作品で特筆すべきは、何よりも美しい絵心だ。端正でしっとりとしている。しかし、決して浮つかず、がっしりとした「絵」をスクリーン上に投影させている。小泉監督は、黒澤明監督によって鍛え上げられた、いわゆる「黒澤組」出身である。本作の絵の美しさは、その黒澤作品を上回るのではないかとさえ思えるほどだ。

かつて黒澤監督は映画の事を「シャシン」と呼んだ。

映像を、カメラのレンズを通してフィルムに焼き付けること。その、なんとも手作業の感覚が、大切に大切に、小泉監督に受け継がれている感じがする。

スクリーンに映る、日本の風景。日本の家並み。そしてなにより、質素ではあるが、毎日の暮らしを丁寧に、丁寧に生きていた、江戸時代の「ニッポン人」そして「武士」の姿が印象的だ。



夫婦の愛、家族の愛、初めての恋、そして師弟の愛—— 混迷を深めるこの時代に、すべての日本人に捧げる普遍の「愛」を紡ぐ物語。

この秋、〈日本人の美しき礼節と絆〉を、日本最高のスタッフ・キャストが絶妙なアンサンブルでスクリーンに映し出す、感涙のヒューマンドラマが誕生します。

原作は第146回直木賞を満票で受賞、浅田次郎氏に「これまでにない完成度」と言わしめたベストセラー時代小説、葉室麟著『蜻蛉記』。演出・脚本を手掛けるのは、巨匠・黒澤明の〈愛弟子〉小泉堯史監督。これまで『雨あがる』、『博士の愛した数式』など人間の内面を丁寧に描いた名作を作り続けている小泉監督が、自身の〈師〉へ

の想いを登場人物を重ねながら、新たな感動を生み出します。メインキャストには、重厚な演技で人々を魅了し続ける日本映画界の至宝・役所広司。『永遠の0』で日本中を感動の渦に巻き込み、今最も次回作が期待される岡田准一。若手実力派女優として圧倒的な人気を誇る堀北真希。『乱』、『夢』と黒澤明監督作品へも出演を果たし唯一無二の存在感を放つ女優・原田美枝子。日本が誇るキャスト陣が集結しました。四季折々の美しい風景の中で描かれる日本映画の真髄、どうぞご期待下さい。



私は決して武士の生き方や、所作を美化しようとか、誉め称えようなどとは、これっぽっちも思わない。

「仏作って魂入れず」と言うたとえがある。

いくら武士として武術が優れようが、その所作が寸分なく完璧であろうが、関係ない。

自分より身分の低いもの、立場的に弱い者。そういった人たちに罪を被せたり、辛い暮らしを負担させたりする者は、すでに武士のココロを失っている。

「美しいニッポン」とか言っているエライ人や、どこかの大都会に「世界の運動会」を呼んだぞ！！と浮かれている人々よ。

武士ならば「弱いものを守ってこそ武士」である事をお忘れなく。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 小泉堯史

主演 役所広司、岡田准一、堀北真希、原田美枝子

製作 2014年

上映時間 129分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=aS00mZIHwmo>

ふしぎな岬の物語

ふしぎな岬の物語

2014年10月22日鑑賞

小百合マジックなんでしょうね

タイトル通り、実に不思議な作品でした。これはプロデュースも務めた「吉永小百合マジック」なのかな。

特にドラマチックなストーリーでもない。

原作は未読ですが、元々は、短編をいくつかまとめて連作としたお話らしいですね。それを元に一本の映画としてまとめているのですね。僕はそれを知らずに観ました。

道理で、なんか、悪く言えば、脚本の背骨がそもそも存在しないようなお話なんですね。

岬の端っこに人知れず佇む、ちっぽけな喫茶店。

そこに集まる、ご近所の人々。その日常を、カフェの店主である、吉永さん演じる主人公を中心として、淡々と描いてゆきます。

本作の監督は成島出氏。そのタッチは、本作で登場する虹の絵のように、ほんわかした、水彩画のよう。



こういう作品の場合、自分の興味のある部分だけに着目して楽しむと言う手もあります。

僕の場合は、主人公の甥の暮らしぶりに注目してしまいました。

彼は吉永さんの岬の喫茶店のすぐ隣に住んでいます。

演じるのは阿部寛さん。

ワイルドです。

なんと、お風呂はドラム缶、下は焚き火。

いわゆる五右衛門風呂。

それも青天井、屋外です。

ほとんど、原始的とも言える暮らしぶり。

庭で焚き火を燃やして、ぼーっとしてみたりする。こういう人の住む家は、もちろん牛小屋か、馬小屋を思わせる建物なんですね。その作り込みの面白い事。



映画女優として常に輝き続けている吉永小百合と「孤高のメス」「八日目の蟬」など数々の名作を世に送り出してきた監督・成島 出の共同プロデュース作品が、この秋誕生する。映画化したいと2人が出逢った原作が、実在する喫茶店

また、主人公の喫茶店の横には、実に小さな、真っ白な家が建っています。よくみると、なんと捻破りの屋根。塗りで仕上げているんです。

雨漏りしないんだらうか？

とにかく、かわいらしく、いじらしく、真っ白な姿で、けなげに建っているんですね、この白い家が.....

まあ、本編上映中、僕は正直、ストーリーそっちのけで、そんなところばかり観ていました。でも不思議。

エンドロールが流れる中、なぜか、ふと涙がこぼれました。

そういう映画なんですね。

主演の吉永さんが、コーヒーを入れる時のおまじない。

「美味しくなあ〜れ、おいしくなあ〜れ.....」

人生、これもやんなきゃ、あれもやんなきゃ。

もっと、もっと、頑張らなくちゃ、と緊張を強いられる事ばかりですよ。

でもこの言葉を聞くと、

「ゆっくりになあ〜れ、ゆっくりになあ〜れ」と僕には聞こえたのでした。

そんな、ゆったりとした気分させてくれる作品ですよ。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 成島出

主演 吉永小百合、阿部寛、竹内結子、笑福亭鶴瓶

製作 2014年

上映時間 117分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=ZtgGLLdM2RM>

映画に宛てたラブレター2014・11月号

<http://p.booklog.jp/book/91103>

著者：天見谷行人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mussesow/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/91103>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/91103>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ